
KEEP OUT 5 死の馬

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KEEP OUT 5 死の馬

【Nコード】

N7337Y

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

美沙の突然の入院に伴い、鴻上支店は2週間の休業となった。けれど自主的に事務所を開けていた春樹の元へ、一人の女が現れ、依頼を持ちかける。

消息の分からない知人を探してほしいと言うものだった。

「これはこの探偵事務所じゃなくて、あんたへの個人的依頼だよ」、
と言う女に困惑しながらも、依頼を受けてしまう春樹。

しかしターゲットの男を捜すうちに、春樹はじわじわと正体不明の

闇に引きずり込まれてゆく。

女は春樹に何を求め、何を植え付けて行ったのか。

春樹、美沙、そして隆也。

この世の辛酸を舐め生きて来た一人の女の出現により、次第に彼らは乱され、出口を見失ってゆく。

最終章へ向けての、静かで残酷な前奏曲。

全24話でお送りします。

第1話 光を追って

十月も終わりだというのに、何てバカみたいに暖かく、世界は光に満ちているのだろう。

女は酔い覚ましの缶コーヒーを、座っていたベンチの端に置くと、自分の世界とは対局にあるような穏やかな街並みをぐるりと見渡した。

車道を挟んだ向かいには、若者で賑わうファーストフード店。

自分が座っているベンチの横には、色とりどりの花を軒下に並べた花屋がある。

全てがしらじらしく陽気で、くすんで腐りかけている自分が滑稽で、嗤いが込み上げてくる。

自分だけが世界の歓喜に背を向けている。

花屋の軒下に、つと、一人の少年が立った。

まるで吸い寄せられるように、店先に並んだ色とりどりの花を見つめている。

女は目だけでその横顔をじっと追った。

少年が無心に花たちを見つめるその表情は、天空から照りつける太陽よりも清純で眩しく見えた。

その透き通るような肌の白さだろうか。

キラキラと亜麻色に光る、絹のような髪だろうか。

それとも、これから花を贈る誰かを想い浮かべて微笑む、その薄紅色の唇のせいだろうか。

目が離せなかった。

女はたぶん、自分が生涯触れることもないだろう清らかな眼差しを盗み見ながら、ひっそりと嗤った。

汚れを知らぬ天使よ。

お前は私の姿など、見えぬだろう。

少年は、店内から出てきた花屋の若い店員に「いらっしやいませ」と声をかけられると、少し恥ずかしそうに何やら質問した。

店員の女が苦笑して首を横に振ると、少年は再び恥ずかしそうに、ひとつ小さく頭を下げた。

そして花も買わずに、すぐ前の車道を横切り、ファーストフード店に隣接するビルに姿を消した。

「お客さん」。また、その人が元気になったら、いらっしやいね」
店員が少年の後ろ姿に掛けた優しい言葉が、心地よく周りに余韻を残していた。

もう少し見ていたかったな。

そんなバカらしいことを思いつつ、少年が消えていったビルを見上げた。

5階建ての古いテナントビル。

看板には、名も知らぬ会社名に混じって探偵事務所の名もあった。
そんな日陰的存在の企業が、近頃はあっけらかんとこんな所に看板を上げているのかと、女は少しばかり驚いた。

ポカンと無心にそのビルを見上げている女の前を、若いカップルが、嫌なものでも見るように一瞥して通り過ぎてゆく。

咄嗟に二人に鋭い視線を投げつけて見たものの、女は再び物憂げな目つきに戻り、空き缶もタバコの空箱もそのままに、のっそりとベ
ンチから立ち上がった。

春樹は3階の事務所の鍵を開け、電気を付けてから通りに面した窓

を全開にした。

美沙が入院中の2週間は事務所を閉めるように美沙に言われていたが、溜まった細かな事務処理や資料の整理、これからの段取りが気になって、とても家にじつとしていられなかった。

「美沙が退院するまで、僕がちゃんと留守番してるから。大人しく治療受けてきてね」

美沙が入院した日。つまり今から5日前、春樹はそう言って市立総合病院をあとにした。

淡々と言っては見たものの、美沙のまさかの入院は実のところ、春樹をとて不安にさせた。

その一週間前から急に体調を崩し、青い顔をしていた美沙は、「ただの風邪よ」と強がっていたが、その数日後の夜いきなり「ごめん、軽い急性膵炎でちよつと2週間ばかり入院することになった」と、病院の外来から電話をくれたのだった。

春樹は不安ですぐに美沙の元に駆けつけたが、MRIやエコー、その他諸々の検査等で結局その日は会えず、その代わり美沙からの手紙を看護師から渡された。

腹の立つほどそれは素っ気なかった。

『春樹へ』

- ・ 事務所は閉めていい。事務処理の遅れは、あとで何とかする。
 - ・ 完全看護だから、一人でなんとかなる。心配はいらない。
 - ・ 広島の母親は心配性だから、連絡しないでほしい。
 - ・ あとは長期休暇だと思って、2週間のんびり遊んでちょうだい。
- - 美沙より』

手紙などではない、単なる指示書だ。

春樹は心底がっかりし、何かしおらしい事が書かれているのかと期待した自分にもガッカリした。

“私はただの上司。それだけだよ”

美沙はそう伝えようとしているのだろうか。

2カ月前、春樹の秘密を美沙が、友人の隆也に打ち明けて以来、美沙の春樹への態度は以前にも増して事務的になった。

人の肌に触れるとその相手の記憶、感情を読みとってしまうという春樹の特殊能力。

その秘密を勝手に隆也に打ち明けてしまったという負い目なのだろうか。

けれどもそのお陰で春樹は隆也という本当の意味での友人を得られた。

秘密を知っても尚、春樹への態度を変えず、心の内を気負い無く見せてくれる、奇跡のような友人を。

美沙にも「感謝してる」と伝えたはずなのに。

なぜ美沙は必要以上に自分を避けるのか。

『美沙、避けなくても貴方には触れない。ぜったい心など覗かない』
面と向かって自分は、美沙にちゃんと伝えなければならないのだろうか。

今さら滑稽だが、そうすれば美沙との関係が今まで通り保てるなら、そうしようとしてまで春樹は思った。

死んだ兄の恋人。姉のように自分を見守ってくれる人。厳しい、けれど尊敬する職場の上司。

それ以上では無いはずなのに、相も変わらず春樹にとって一番怖いのは、美沙が自分から離れていってしまうことだった。
化け物のような能力を持つ、自分から。

不意に入り口のドアがコンコンとノックされた。

春樹はハツとしてドアに目をやる。

アポ無しで客が来ることは今までほとんど無かった。

薫だろうか。それともその兄、最近よく訪れるようになった局長の立花聡だろうか。

「はい、どうぞ。開いています」

春樹が声を掛けるとドアはゆっくり押し開けられ、やがて様子を伺うように顔を覗かせたのは、40前後と思われる、化粧の濃い、気だるい目をした女だった。

女はアイラインとシャドウで沈着した目元に皺を寄せ、目を凝らすようにじつと春樹を凝視しながら、ゆっくりと後ろ手にドアを閉めた。

“水っぽい”

女を包む、ほの暗い隠微な空気の揺らぎが、春樹にそんな印象を与えた。

「探偵事務所だと思って来たんだけど。なんだ・・・坊や、ひとりなの？」

そのねっとりとしたローズレッドの唇から出てきた言葉は、少しかり春樹の自尊心を刺激した。

第3話 依頼人の女

「ご依頼ですか？」

春樹はその少々無礼な物言いの女に、努めて冷静に返した。

「あら、やっぱり探偵事務所だったの？ 可愛い坊や一人だったんで、学習塾にでも入り込んだんじゃないかと思った」

女は玉虫色のラメの入ったロングスカートを揺すり、ぼつてりとした唇をゴムのようにひき伸ばして笑った。

どこか陰気な笑いだ、と春樹は感じた。ムスク系の濃厚な香りが、部屋の中に広がってゆく。

苦手だな。

春樹は一瞬、本能的にそう思ったが、もしも依頼人ならば大事なお客様だ。

丁寧な対応をしなければ、と春樹は背筋を伸ばし、女を応接用のソファに座らせた。

「所長の戸倉は暫く不在なので、実際の業務は休止中なんですけど・・。もしお急ぎでしたら、本社の方に取り次がせていただきます」

「あら、坊や、本当にこの社員さんだったの？ こっそり入り込んだ学生さんじゃなくて？」

「・・・いえ」

春樹はムツとする気持ちを抑えて自分の名刺を差し出した。

実際の年齢よりも、自分の外見が幼く見えることを春樹は充分承知しているし、今までにも春樹の若さに意外そうな顔をした依頼人は多かったので、別段気にもならなくなっていた。

しかし、こんなにあからさまにそれを口にされたのは初めてで、そこに含まれる僅かな嘲笑が、少々春樹の坎に障った。

「天野春樹君・・・か。いい名前ね。じゃあ、春樹君に調べてもらつちやおうかな。別段急がないし」

女はトロンとした目で正面のソファに座る春樹をじっと見つめた。ムスクでは隠せない、アルコールとタバコと生活の匂いが重く春樹の周りに漂った。

「この鴻上支店では、行方調査専門にしています。それ以外の調査でしたら、本社扱いになります・・・」

「それなら問題ないわ。人を捜してほしいのよ。男の人」
「そうですか」

言いながらも春樹は、断る理由をどこかで探している自分に気付き、戸惑った。

「わかりました。・・・お急ぎで無いと言うことでしたら、所長の戸倉が戻りましたら、改めてご連絡させていただきます」

「あんたが居るじゃない」
「え？」

「あんたは何にもできないお人形じゃないんでしょ？ 探偵さんなのよね？ それともやっぱりこの事務所の、ただのお飾りなの？」
女の目が少しばかり凶暴に鋭く光った気がして、春樹はゾクリとした。

けれども、よくよく考えれば女の言葉はどれも間違つてなどいない。名刺を出し、用件を聞いておきながら、支店へ行けだの、所長が戻るまで待てだのと言った自分の対応は正しいとは言えない。

しかし実際問題、自分一人での契約や調査は経験が無く、自信も無かった。

きつと美沙も快く思わないだろう。

「受けてよ。別に急がないしさ」

春樹の戸惑いを察したのか、女は少し口調を和らげて再びそう言った。

「では、所長に連絡しますので、明日まで待つて頂けるでしょうか」
「その必要はないよ。あんたに依頼するから」

「・・・え？」

「立花探偵事務所でも、戸倉つて人でもなくて、あんた個人と契約を交わすよ。あんたが探して頂戴、あの男を。金は全額あんたに直で払うからさ」

春樹はとっさにその意味が理解できず、答えに窮して女を呆けたように見つめた。

仕事としてやることと、個人としてやることと、この女にとって何か意味合いが違うのだろうか。

「ポケットとしてないで書き留めてよ。今から探す男の事、言うから。名前は町田健一郎、43歳・・・」

春樹は慌ててメモパッドに女の口から流れ出る情報を書き留めた。

けれどそれは名前と年齢、風貌、以前の勤め先以外に参考となるものは何もなく、“ただの知り合い”程度の、漠然とした情報だった。
「別に逃げ回ったり、やばい感じの男じゃないから、すぐに見つかると思うよ。見つけたらすぐに教えてよ。金はあんたの言い値でいい。あ、そうだ、あたしのケイタイの番号言うから、あんたも教えてくれる？ 名刺には事務所の電話番号しか書いてないもん」

「・・・はい。番号は教えますが、契約書は一応書いて貰ってもいいですか？」

なぜ僕個人にこだわるのだろう。

いぶかりながらも春樹は自分の携帯番号をメモに書いて渡し、女に調査依頼書の記入を促した。

実際、個人的に仕事を請け負うなど有り得ない。春樹は当然、事務所の仕事として依頼を受けるつもりでいた。

女は「面倒くさいね」といいながらもペンを取った。

名前・・・藤川咲子。年齢・・・39歳。

そのあと現住所、電話番号、勤め先。

春樹はじつとそれを静かに目で追った。

女、藤川咲子の香水は少しばかり強すぎて、頭がクラクラする。

39歳か。もう少し上かと思っていた。

そんなことを思いながら咲子の手元を見ると、その動きが一瞬止まった。

『【調査対象者との関係】 - (任意)』の項目だ。

再びサラサラと動き出した手が記した文字を見て、春樹は戸惑った。

・・・愛した男、憎い男。探し出して殺してやる。・・・

春樹の表情を感じ取ったのか、藤川咲子はニヤリと笑い、わざとらしくその文字にゆっくり二本線を引いて消した。

からかわれた！

春樹がそう気付いて咲子に視線を合わせると、咲子はもう興味も無さそうに「こんなもんでいいでしょ？」と言い捨て、ボールペンを書類の上に転がした。

「あの子、可愛いですよ。毎日面会に来る、色白の草食系男子くん。最初見たとき高校生かと思いました。まさか戸倉さんの部下とはねえ」

点滴の準備をしながら、美沙の担当の若い看護師、北村が言った。

ほんの少しぼつちやりしたその看護師は、春樹を気に入ったらしい。

「ああ、春樹ね。かわいいでしょ？でも手を出しちゃだめよ。見た目と一緒に、まだほんの子供なんだから」

「あら、ダメですか。ざーんねん。でもあんな部下がいたら仕事も楽しいでしょうね。いいなー、戸倉さんが羨ましい」
たぶん本気でそう思っているだろう北村をちらりと見ながら、美沙はやっぱりと口元を緩めた。

外見にしる何にしる、春樹のことを褒められると自分のことのように面はゆく、つい嬉しくなってしまう。

離れていればいるほど、愛おしさを痛感する。

距離を保たなければと思い、『見舞いにはあまり来なくていい』という旨の手紙を書いたのだが、当の美沙が、早くも春樹のいない時間の寂しさに参りつつあった。

手紙を受け取ったにもかかわらず、この5日間、春樹は一日一回、必ず病院に顔を出してくれた。

最初の日は、あまりに心配そうな顔をするので、『絶食と点滴と投薬だけで、ちゃんと治るから』と、懇々と説明してやらねばならなかった。

次の日も、その次の日も、顔を出してはくれたが、食べ物差し入れも出来ず、他の患者の手前仕事の話も出来ず、春樹はいつもほんの半時間でソワソワし始める。

そして結局最後はぎこちなく「お大事にね。また来ます」と、小さく言って、帰って行くのだ。

ねえ、もう少し居てよ。何も話さなくていいから。

喉まで出かかった情けない言葉を飲み込んで、美沙はいつも自嘲する。

少年に触れられず、苦しいとき助けることも出来ず、誤解を与えて傷つけるだけならばいっそ、手放す方がいい。

いつか離れなければならぬならば、お互いにとって早いほうがいい

い。

答えは出ているのに、いつもそれを先送りにする。
まだいい。もう少しこのままで、と。

・・・春樹、明日も見舞いに来てくれるかな。

今まで仕事で飽きるほど毎日顔を合わせて来たというのに、少しでも離れたらこれだ。

自分のこらえ性の無さに心底呆れ、美沙は苦い笑みを浮かべた。

第3話 優しい蟻

「へー、春樹ひとりで依頼を受けたのか。で？ どんな調査？ 大変そう？」

隆也は身を乗り出し、春樹に好奇心いっぱい目の目を向けてきた。

春樹はうつかり喋ってしまったことをひどく後悔し、自室の天井を仰いだ。

予備校の帰り、いつものようにふらりと春樹の部屋へ遊びに来た穂積隆也は、本日ビール持参だった。

また母親と派手に喧嘩でもしたのだろう。

隆也が酒を飲むのは、そんな可愛い憂さ晴らし目的の事が多かった。ほんの少しアルコールが入ると色白の頬が赤くなり、目が潤んでくる春樹を、隆也はいつも「女の子みたいだ」と笑う。

それが悔しくて平気な振りで飲み続け、結局いつも気分が悪くなり、突っ伏して再び隆也に笑われるのが常だった。

穂積隆也。酔うとタチの悪い悪友。そして春樹にとって唯一無二の掛け替えのない親友。

春樹の秘密を知って尚、今までと変わらず付き合ってくれる、大切な友達だった。

「ほら、蟻だ。蟻だと思えばいいさ」

秘密を知ったあとで隆也はそう言った。

「アリ？」

「そうだよ、蟻はさ、言葉の代わりに触覚を触れあわせて心をやり取りするんだ。春樹もそうさ。でっかい蟻。残念だなー。俺もそんな能力があったら、内緒の話とか出来るのにさ」

そう言いながら、ふざけて春樹に触れてきた友人の温かい手から読み取ったのは、本当に無数のアリだった。

春樹は可笑しくて可笑しくて、泣き笑いしながら隆也に抱きついた。そして再び隆也から流れ込んできた感情は、無数にじゃれ合う蟻と、青く澄んだ空と、『春樹、元気出せ』の想い。

春樹はその時、この友人だけは決して失いたくないと強く思った。

その無二の親友にも、それなりに欠点はある。

探偵業が気に入らず、事あるごとに「そんな仕事やめて、進学しろよ」と春樹に無理強いするくせに、興味だけはあるようで、やたらと仕事の話を聞きたがる。

酒でぼんやりしていたこともあり、つい口を滑らせてしまった本日の依頼の話に、隆也は喜々として飛びついてきたのだった、

「内容なんて言えるわけじゃないか。依頼人のプライバシーだ」「いいじゃん、絶対秘密にするからさ。どうせ春樹一人じゃ調査出来ないし、本社に回すんだろ？」

「いや・・・僕一人でやってみようと思うんだ」

「マジで？ 美沙さん、承知か？」

「美沙にはあとでちゃんと説明する。今は心配掛けるといけないから、内緒で進めるけど。それに・・・依頼人が、そうしてくれって言っただ」

「依頼人が？」

「うん。出来れば僕個人に依頼したいって」

「えー……。それって・・・」

隆也は小さなテーブルに更に身を乗り出し、目を輝かせた。

「事務所通さない、直の仕事？ マージン丸儲け？」

「嫌らしい言い方するなよ。一応事務所を通す形で契約書を書いて貰ったし。ただ、気持ちの問題だよ。依頼人にそう言われたら、僕がしてあげなきゃって思うし、何かミスした時は、僕個人が責任を

とればいいし」

「もうひとついいことがあるぞ」

隆也はニヤリとして春樹の目を覗き込んだ。

「俺が手伝ってやれる」

「はあ？」

春樹は冗談じゃないとばかりに、おもいきり渋い顔をしてみせ、「もう帰れ、酔っぱらい！」と、隆也のジャケットをその頭にパサリと被せた。

翌日の朝、春樹は町田健一郎の調査にあたる前に、美沙の病院にちよつとだけ顔を出すことにした。

バスを降りると、たいして資料も入っていないファイルケースを抱えながら、春樹は病院前でいつものようにちよつとだけ気合いを入れた。

若い女性ばかりの四人部屋にいる美沙を見舞うのは、春樹にとって、けっこう気まずいものだったのだ。

青い顔でTVを眺めている見知らぬ女性の横で、これまた点滴につながれたパジャマ姿の美沙を前に、何を話したらいいのか分からない。

ソワソワする春樹に、美沙はいつも「もう、来なくていいのに」と苦笑するのだ。

それでも、春樹は必ず見舞いに行った。行って何を話すわけでもないのだが、春樹が顔を見せたときに一瞬見せる、あの笑みがどうしても見たかった。

美沙の病室があるフロアのナースステーションをちらりと覗くと、見知った看護師が笑いながら手を振ってくれた。

軽く会釈をして通り過ぎた春樹だったが、少し行ったトイレの前で、珍しい人物の背中を見つけ、ドキリとした

高身長でスレンダー。

ほんの少しロマンスグレイの入ったその後ろ頭は、誰のものかすぐ分かる。

「立花局長？」

春樹が声を掛けると、立花聡はハツとしたように振り返った。

「ああ、春樹君。君もお見舞い？」

その口元から誰からも好感を持たれそうな穏やかな笑みがこぼれた。関東にいくつも支社を持つ、立花フランチイズ探偵社のトップ。社長ではなく、親しみと敬意を込めて皆が「局長」と呼ぶ、立花聡その人だ。

弟である薫同様、よく美沙と春樹の鴻上支店にふらりと立ち寄るが、なぜか聡が来た時だけ春樹はソワソワする。

美沙の目が、話し方が、笑顔が、心なしかいつもより華やいで見える。

薫に対するフランクなものと違う、特別なものを感じていた。

美沙が尊敬する局長なのだからと割り切っているはずなのに、それでもザワザワとしたものが春樹の心臓あたりでうごめく。

春樹自身、その不快で不可解な感情にいつも戸惑わされていた。

その「戸惑いの元」が、今、少しばかり不安げに春樹の前に立っている。

いつも聡明で堂々としている局長らしくもなく、見知らぬ土地で迷子になった子供のようだ。

「春樹くん。ああ、よかった。なんというか・・・ここまで来てから気がついたんだが、女性の見舞って、初めてでね。いきなり病室に入ってもいいもんなんだろうか。病室はきつと女性ばかりだろ

うし、・・・やっぱり帰ろうかって、ずっとここで迷ってたんだ。君が来てくれて本当に良かったよ」

聡は完璧とも言える体型をシルバークレイの仕立ての良いスーツに包み、涼やかな目元を細めて安堵の笑みを春樹に向けた。

新入りで下っ端で、自分の子供くらいの年齢の春樹に対し、自分の弱みを取り繕うこともしない。

本当の心根が強いからこそ持ち得る、大人の優しさ、包容力が感じられる。

春樹が逆立ちしたってかなわない。

自分が女だったら、きっと心惹かれていると思える、大人の男の魅力だ。

春樹の中の何かが、今もまた、ザワリと揺れた。

第4話 意地悪な虫

「君も美沙さんのお見舞いだろ？ 一緒に病室に行って貰えると嬉しいんだけど」

立花聡は、哀願するように春樹に言った。

知的で涼やかな40過ぎのこのボスは、そんな心細そうな表情を作っても不思議と様になる。

「いいですよ」

春樹は聡を導くように、病室に向かって歩き出した。訳もなく、胃が重苦しい。

「なあ春樹君、知ってたか？ この病院って見舞いに花を持って行っちゃいけないんだってね。さっきナースセンターで注意されたから、持ってきた花預けてきたよ。俺さあ、見舞いって言ったら花だと思ひ込んでんだ」

きまり悪そうに言う聡に、春樹はわざと素っ気なくポツリと言った。
「知ってますよ。最近は特に衛生管理が厳しくなって、ダメみたいです。この病院だけじゃなく」

「そうなのか。知らなかったなあ」

ほんの少しの罪悪感を抱きながら、春樹はチラリと聡を見た。

実のところ春樹も偉そうに言える立場ではない。

食べ物の差し入れは出来ないので、美沙に花でも買って行ってあげようかと、少しドキドキしながら事務所前の花屋を覗いたのは昨日のこと。

そこで初めて、『あの病院は、お花を持っていけないはずですよ』と花屋の店員に教わったのだ。

「607号室。ここだね」

美沙の病室の前まで来て、聡は立ち止まった。ちよっと気恥ずかしそうに春樹に笑って見せたあと、聡はゆっくりスライドドアを開ける。

手前の二つのベッドはカーテンが引かれていたが、窓際のベッドはいずれも開け放たれ、その一つで、薄ピンクのパジャマを着た美沙が、退屈そうに雑誌をめくっていた。

けれどふとドアに目を向けた美沙は聡を確認するやいなや、あたふたと居住まいを直し、少女のように頬を赤らめた。

春樹には、そう見えた。

「立花局長、どうしたんですか。・・・びっくりするじゃないですか」

美沙がうわずった声を出すと、聡もバツが悪そうに小さくなり、「いや、近くに来たもんで、ちよっとお見舞いにと思っただ。・・・ごめん。迷惑だった？」

いつもの風格はどこかへ消し飛び、まるで何かを失敗して反省している中学生のようだ。

春樹は静かに少しずつ後退し、それでも美沙がこちらに視線をよこさないのを確認すると、そのままクルリと踵を返し、病室を出た。後ろで美沙が「春樹？」と呼んだような気がしたが、立ち止まりもせず、僅かに消毒液のする廊下を突っ切り、エレベーターに滑り込んだ。

別に何が気に入らない訳ではないし、ましてや怒っているわけでもない。

ただザワザワと心臓あたりで蠢く虫のようなものが、“外へ行こう”と促すのだ。

“ほら、外の空気を吸えよ。お前がここに居たって仕方がない。”

何度お前が来たって、美沙はあんな表情を見せやしないだろう？”

春樹は調査資料を入れたプラケースを握りしめたまま、風の強くなつた屋外へと飛び出した。

自分がここにいる理由はない。

自分がしなければならぬのは仕事だ。依頼を受けた仕事。

春樹の調査報告を待っている依頼者が居る。だから町田健一郎を捜すのだ。

今はただ、それが春樹の心の寄りどころだった。

咲子がくれた町田の情報は本当に少なく、以前彼が努めていた会社の名刺一枚が全てだと言つてもよかった。

町田は、咲子が勤めているクラブと同じ区内にある、中小証券会社の営業マンだった。

一年半前ひよっこり咲子の店に現れ、馴染みの客になったが、半年前に急に姿を見せなくなったという。

噂では会社を辞めてしまったと聞いたが、出来れば今現在の所在を知りたいのだと咲子は言つた。

依頼を受けたその日、

「差し支えなければ、町田さんを探す理由を教えてくださいますか？

どんな些細な事でも手がかりにしたいんです」と春樹が訊くと、咲子は気だるい目を細めて、「差し支える」と言つた。

そしてそのあと、自分がふざけて書類に書いた《探し出して殺してやる》という文字を、ボールペンでカシヤカシヤと真っ黒に塗りつぶしながら、「元氣でいるか、知りたいだけよ」と、ポツリと言つたのだ。

ただ、もう一度会いたい。

たぶん、それが本心なのだろうと春樹は感じた。

町田健一郎を捜し出して、咲子に会わせる。

それが出来れば、この咲子の周りに漂う、粘り着くような暗色の力ーテンを取り払うことができるのかもしれない。

最初は苦手な女だと感じたが、肌に触らずともビリビリと電気のように伝わってくる、咲子の負の感情が、春樹を突き動かした。

“ 何かに似ている ” と感じたが、それが何かは分からない。

とにかく面倒くさい自分自身の問題はひとまず忘れてしまおう。

今はこの与えられた課題を全力でこなし、一人の人間の願いを叶える、それだけに集中しようと春樹は自分に言い聞かせた。

第5話 町田

病院を出てから一時間後、春樹は町田健一郎が勤めていた水島証券の本社ビルの前に立っていた。

個人投資家相手のリテール営業が中心の中小証券ということもあり、自社ビルもわりと小ぢんまりとした印象だ。

先だって電話で、町田が半年前に辞めたことは聞きだしてあったが、さすがにそれ以上は踏み込めなかった。

正攻法としては正面から出向き、彼の顧客を装って情報を聞き出すのが一番だと思ったが、どう転んでも高校生にしか見えない春樹に、それは無理だった。

他に手もなく、春樹は幼さを逆手に取ってみることにした。

「え？ 町田さん、会社辞めちゃったんですか？ どうしよう、せっかくお金を返せると思ったのに。あの・・・自宅とか教えて貰えませんか？」

春樹は1年前、岡山からこの街に2、3日遊びに来た事のある少年という設定を作り出した。

JRの駅前で全財産の入った財布を無くした事に気付いた自分は、親切な町田に助けられ、帰るための金を貸してもらった。町田はこの会社の名刺を一枚だけ春樹に渡し、次にこの街に来たときでいいよ、と、笑いながら言ってくれたのだと、受付の女性に話したのだ。

「へえ、町田さんが？ ああ、でも、あの人なら有り得るな。すつごく優しいから」

女性社員は思い出すようにやんわり笑ったあと、休憩を入れようとしていた40がらみの太った男性社員を捕まえ、「話を聞いてやつ

て下さいよ、部長」と言つて春樹を紹介した。
男性社員の胸には“営業部長 河田”とある。
春樹の代わりに女性社員があらましを説明してくれると、河田は懐かしそうに目を細め、「町田らしい」と呟いた。

河田は事務所の隅に置いてあつた丸椅子を春樹にすすめると、自分も向かい側に座り、懐かしそうに話し始めた。

「あいつはそんなところがあつたよ。困った人を放つとけないタイプでさ。自分に時間がない時だつて、他人に時間を割いてやれる奴なんだ。そう言えば、俺もいろいろ愚痴を聞いてもらったな。たぶんね、君に貸したお金だつて、返つて来なくていいと思つてたと思うよ」

どうやら、春樹が思いつきで作つた設定は、偶然にも町田の人間性に沿つていたようだった。

「だけど半年前に急に会社を辞めちまつて、それ以来ぶつたり消息が消えちゃつてね。マンションも引き払つてるし、実家とも連絡が付かないし。保険等の事務手続きが終わったあと、気がついたら、だれも連絡先を知るものは居なかつた……つて感じなんだ」

半年前に消えた。

咲子の前からだけでなく、この街から町田は消えたのだ。

難しい調査になりそうな予感がして、春樹は少しばかり気が重くなつた。

念のために実家の住所と電話番号を訊いた後、出入りしていた場所があれば教えて欲しいと願ひ出た。

けれど河田の口から出てきたのは、何のことはない、『華蓮^{かれん}』。
咲子の勤めるクラブの名だった。

「まあ、君にはまだ縁のない世界だな、青少年」

河田は最後にそう言って笑った。

春樹はそのでっぷりと太った気のいい営業部長に丁寧に礼を言って、本社ビルを出た。

振り出しに戻ったかな。

春樹はどこか冬の匂いのする歩道で一つ、ため息をついた。

そこに勤めている咲子自身が何の情報も持っていないのだから、当然収穫は望めないだろう。

けれど、無駄だと思っても他に手は無かった。

もしかしたら咲子以外のホステスに、何か僅かでも情報を貰えるかも知れない。

春樹は、店が開店準備を始める時間を待って行ってみることにした。調査中、咲子に出会わなければいいな……。そんなことを思いながら。

第6話 華蓮

クラブ『華蓮^{かれん}』は、雑居ビルの地下一階にあつた。

5時くらいから店の前に貼り付いていた春樹は、いかにもホステスらしい女性が階段を降りようとするのを呼び止め、訊きたいことがあるのだと正面から切り出した。

咲子よりも少し若いと思われるその女は、器用にセットした巻き髪を触りながら、「いいよ。なんでも訊いて頂戴、少年」と屈託なく笑った。

「あの、いくつかの質問の前に・・・今日は咲子さんも、この時間に出勤ですか？」

依頼人と出くわすのはなんともマヌケだ。どうにか避けたいと思い、春樹は予防線を張った。

「咲子？ 咲子ですって？ 彼女ならひと月も前に辞めたわよ」

「え？ そうなんですか？」

「うん。でも、なんでそんなことを訊くの？ 咲子の知り合い？」

「・・・」

「込み入った話？」

女はさつきまでの笑いとは別の、密やかな笑いを口元に浮かべ、びつしりと付けまつ毛で縁取られた目で春樹を覗き込んだ。

「ねえ、店へいらっしやいよ。君の質問にゆっくり答えてあげるから。こんなところじゃ、話しにくいんじゃない？」

ふわりと甘ったるいローズの香りが漂う。

おいでと手招きする赤いマニキュアの指に吸い寄せられるように、春樹は薄暗い階段をゆっくりと降りて行った。

咲子は辞めていたのか。

なぜ、それを言わなかったのだらう。隠す必要もないものを。

いや、もしかしたら咲子は、重要なことは何も春樹に伝えていないのかもしれない。

そんなことを取り留めもなく考えていると、ふいに「入って」と女の声が飛んできた。

従業員用の入り口と思われる細く簡素なドアを女と共に入ると、雑多なもので溢れた薄暗い小部屋があり、そこにはすでに二人のホステスがソファに身を沈めていた。

化粧と香水の匂い。

年輩の女の方は普段着だったが、一番若い茶髪の女は、豊満な胸の谷間がくつきり見えるドレスに身を包み、組んだ白い足がスリットのせいで付け根まで見えそうだった。

春樹が目のやり場に困り、赤くなつてうつむくと、巻き毛の女は面白そうにケタケタ笑い、先に来ていた二人に声を掛けた。

「リツコ姉さん、ミヤコ。可愛いお客さんよ。咲子のことを聞きたいんですって」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

春樹は慌てて首を横に振ったが、リツコと呼ばれた40後半に見える女と、ミヤコと呼ばれた20代と思われるドレスの女はムクリと体を起こし、こんな場所に不釣り合いな少年に好奇の目を向けた。

「座りなよ、少年。私は奈津実。リツコ姉さんに続いて古株だから、何でも訊いてよ」

奈津実は春樹をリツコ達の向かいのソファに座らせると、自分もその横にドスンと座ってハーフコートを脱いだ。

こちら胸元と背中が大きく開いた紺のシフォンドレス。

成熟した大人の肌をわざと見せるための服なのだと、頭の隅でボンヤリ思った後、息苦しさで居心地の悪さに春樹は身を小さくした。

「あゝらら。また奈津実の病気だよ。本当にあんたって若い坊や好きよね。ついに拾って来ちゃったわけ？」

ロングトレーナーにスパッツ姿のリツコが、タバコに火を付けながら苦笑したあと、自分もテーブルに身を乗り出して春樹を覗き込んだ。

「ああ、でも、可愛い子だ」

ハスキーな声でリツコが言う。

「少年。奈津実さんは手が早いから気をつけなさいよ」

他の二人よりも明らかに肌も若く艶やかなミヤコがニヤニヤしてそう言つと、

「馬鹿言わないでよ。この子が訊きたいことあるって言うから、親切に連れてきてやってただけじゃん」と、奈津実は口を尖らせた。

「咲子のこと知りたいの？」

ようやくリツコが本題を口にしてくれたので春樹はホッと、とにかく用件を早くすませようと身を乗り出した。

「いえ、じつは咲子さんの事ではなく、半年前までこちらにお客として来ていた町田健一郎さんを捜しているんです」

「町田さん？」

ミヤコはキョトンとしてリツコと奈津実をみたが、二人のベテランホステスはチラリと顔を見合わせ、目配せした。

「少年、名前は？」と、リツコ。

「あ・・・天野春樹です」

「春樹くんか」

とつさに言ってしまったから春樹は自分の未熟さに顔を赤らめた。調査員であることを隠している場合、とりあえずは名前を偽るのが原則だった。

「ねえ、春樹くん。それは咲子に頼まれたの？」

リツコの質問に春樹はドキリとして、しきりに首を横に振った。

「いえ、咲子さんは関係ありません。これは、僕の個人的な事で」

「そうか、咲子に頼まれたのね」

「違います！」

「かわいいなあ。まあいいじゃない。どっちだって」

3人のホステスは心底楽しそうにクスクス笑い、

「もし春樹君が探偵さんだったら、再教育だね」、という奈津実の追い打ちで、春樹は再び顔から火が出そうな恥ずかしさと憤りを覚えた。

「ちが・・・そんなんじゃないです！」

「だったらそんなムキにならなくていいでしょ？ 春樹くん。からかつちやいけないタイプだったかな？ 君は」

奈津実はそう言うのと、楽しそうに春樹を覗き込んできた。

「さ。もうからかうのはやめるから、何でも訊いてちょうだい、坊や」

悔しかった。

“春樹は未成年だし、風俗店には調査に回らないこと”

“勝手にやろうとしないで、まずは私に相談しなさい”

“一人じゃ無理だから。私が居ない間は、事務所を閉めます”

結局の所、いつまでたっても自分は、美沙の中では無能な子供なのだった。

そうじゃない、一人でやれる、美沙の片腕になれる。

そう思っただけで突っ走る度、すべて裏目に出て、今までに何度も失敗した。

もうこれ以上自分の無能さを思い知るのは嫌だった。

何の価値もないと、悔しくて眠れぬ夜を過ごすのは嫌だった。

「お願いします。何でもいいから町田さんの情報が欲しいんです」

「おお、真剣だね、少年」

ミヤコが茶化す。

リツコはタバコの煙を器用に右側に吹き出し、「どうしようかねえ」と勿体付けて呟いた。

そして奈津実は相変わらず楽しそうに春樹を金魚でも鑑賞するように眺め、

「じゃあさ、ここにチュツてしてくれたら、教えてあげる」と、自分の赤い唇を指でつついてニンマリ笑った。

第7話 悲しい女

「本当に町田さんの情報を、奈津実さんは知ってるんですか？ だったら僕は、キスだって何だってします」

春樹は横に座る奈津実に向き直り、真剣な目で言った。

自分がいったい何を言ったのか、その意味を春樹自身充分わかってるつもりだった。

それでもその瞬間、奈津実の自分に対する軽い愚弄が許せず、その言葉を吐き出してしまった。

その春樹の気迫に、ほんの冗談のつもりで言った奈津実は虚を突かれたように目を見開いた。

「やあね・・・冗談よ。そんなふうに言われると、私すつごく悪いことしてるみたいじゃん」

「悪いことしてんのよ、奈津実は。あんたの負け。この子は真剣なのよ。ね、そうでしょ？ 春樹くん」

リツコは柔らかい笑みを春樹に向けてきた。

「・・・はい」

けれども、そう答えた春樹の胸はザワザワと不規則にざわめき、胃に砂を流し込まれたような不快感が残った。

自分自身がたった今言った言葉に、改めて嫌悪した。

『キスでも何でもします』

それは譲歩でもなんでもない。

女の肌に触れ、こちらが欲しい情報を全て絡め取ってやりたい。そういう事だったのではないのか。

春樹は次第に動悸が激しくなっていくのを必死でなだめながら、平静を保つのに全神経を集中させた。

今は余計なことを考えるな、と。

「残念ながら、町田さんが今どこにいるのかは私たち、誰も知らないわ。君がもし咲子に頼まれて町田さんを捜しているのなら、私たちが役立つことは無いのかもしれない。咲子のほうが、町田さんに詳しいはずだもの」

落ち着いた声でリツコはそう言った。

「でも、咲子さんは何も教えてくれなかったんです。もしかしたら、僕を試しているのかも知れない。・・・あの、何でもいいんです。些細なことでもいいから、情報が欲しいんです」

あっさりと依頼人を認める発言をしてしまったが、ホステス3人はもう茶化したりはしなかった。

そして春樹にも、もう、何を隠す意味も感じられなかった。

どんなにカツコ悪くても、能力を使わずに情報を得て、咲子を納得させることに集中しなかった。

「試す・・・ねえ。咲子が考えてることは、昔から分からなかったけど・・・。いいわ、ここで過ごした町田さんのこと、思い出してみましようか。なにかヒントになるかもしれない」

リツコはそう言って、ぐっと身を乗り出してきた。

「春樹君は、町田さんと咲子のことを、どこまで知ってるの？」

「町田さんのことは、以前の勤め先の名刺を一枚もらっただけです。咲子さんについても、ここで働いていて、町田さんと親しくなったと言うことだけで」

ホステス3人は、軽く目配せをした。

「咲子はおもしろかったら本当に町田さんのこと、何も知らなかったのかもね。私たちが思ってた以上に。可哀想な女。結局のところ、最後の望みにも逃げられたのよ」

奈津実があまり感情の籠もらない声でつぶやいた。

そのあとリツコは、どんな言葉も聞き逃すまいと、じっと見つめてくる春樹に、まずは二人の出会いについて簡潔に語り始めた。それは一見、どこにでもある客とホステスの出会いだった。

一人のホステスが、ある日客として訪れた1サラーマンに惚れてしまった話であり、その男が半年前に忽然と姿を消してしまつて、儚く終わった恋の話だった。

どこにでもある陳腐な物語。

町田の人間性なり、交友関係なり、田舎の話なりを書き留めようと手帳を開いた春樹だったが、そこを埋めたのはほんの数行だった。

けれど、「でも、本当の二人の関係を知りたいなら、もっと深い話があるよ。咲子の生い立ちからの話になるけど、聞く？ あの子は客に自分の身の上話をするのが好きだったから、別に怒りはしないと思うし」、というリツコの前置きのあとで聞いた話は、春樹を震撼させた。

それは余りにも仄暗い、悲しい女の物語だった。

藤川咲子。

母を早くに亡くし、父親の元で育つが、父親のアル中と暴力により児童相談所に保護され、そのまま施設で育つ。

中卒で住み込みの紡績工場で働くが、20歳で水商売の世界へ入る。すぐに恋仲となった男と暮らし、その男の仕事を手伝うが、不動産サギ紛いの商法だったとして、男は逮捕され5年の実刑。

片棒を担いだ咲子も、長期の裁判の末、半年ばかりの保護観察処分となった。

その後、本名の「咲子」を源氏名に使い、再び水商売の世界に戻るが、転がり込んできたヒモ男の影響で次第にドラッグに手を出すようになる。

ヤクザとのからみや、横流し、売買と言ったことはなかったが、販売元の思わぬリークから薬物所持を摘発され、ヒモ男は懲役。咲子には一年の執行猶予がついた。

男を愛しては騙されて利用され、また愛しては捨てられ。

あんなに自分を苦しめたドラッグを尚手放せなかった愚かな女が、やっと出会えたのが町田だった。

町田はいつもただ黙って咲子の隣に座り、咲子話を聞いた。

客話を聞いてやるのが仕事の咲子が、いつも自分の身の上を語り、愚痴を言い、町田は静かにそれらを自分の中に収めてくれた。町田が自分から語るのはただ、幼い頃遊んだ田舎の話と、飼っていた犬の話くらいだったという。

話の弾みで、ドラッグの話が出ると、町田はいつになく強い口調で、今すぐやめるように約束させた。

そのころ咲子がやっていたのは合法ドラッグであったが、それでも町田は真剣に咲子を説得した。

そして、「ちゃんとやめられたなら、なにかお祝いをしてあげる」と町田は言い、咲子は「オフの日にドライブに行きたい」と子供のようにつつした。

その約束の日から咲子は合法も非合法も、全てのクスリをやめた。けれど期を同じくして、町田も姿を見せなくなった。

それが今から半年前だ。

一瞬咲子の前に舞い降りた天使は去り、代わりに死神が住み着いた。昔、同棲していた組の構成員の男が、再び転がり込んできたのだ。アルコールが入ると暴力を振るうその男をアパートに住まわせながら4カ月、咲子は町田を待った。

けれど結局身が持たず、咲子は店をやめ、男から逃げるように、アパートを出て行ってしまったのだ。

これが、その時リツコが語ってくれた咲子の半生だった。

春樹は、事務所横のいつものファーストフード店にふらりと入っていった。

ボンヤリした頭でドリンクを注文し、空いているカウンターのスツールに腰掛けると、鈍く痛む頭をそっと、冷たいカウンターの天板に伏せた。

「どうした？ 春樹」

カウンターにしばらく突っ伏していた春樹の髪に、ポンポンとやさしく触れる手があった。

春樹が疲れて居るだろう時は決してふざけて肌に触れてこない、優しい友人の手。そして声。

自宅からも予備校からも遠い癖に、なぜかいつもここで出会う。

時にその優しさは強引だったりもするが、心も体も疲れ切っている時には、その存在に胸が熱くなるほど救われ、勝手だと思いつつも甘えたくなる。

「うん。ちょっとね。・・・今日は疲れた」

春樹がカウンターに伏せたまま、顔だけ声の方に向けて笑ってみせると、隆也は「そうか」、とだけ言い、もう一度春樹の頭をポンポンと叩いた。

「気持ちいい・・・」

春樹がぼんやりそう言っていると、隆也は秋の木洩れ陽のように、静かに笑った。

第8話 暗中

「きのうは春樹くん、来なかったんですか？」

美沙の腕の留置針の具合を確認しながら、担当看護師北村が、ちょっとイタズラっぽく美沙に言った。

「どうして？」

「戸倉さん、浮かない顔してるから」

「晴れ晴れした顔の入院患者を捜す方が難しいんじゃない？」

美沙はワザとおどけたように言い返してみたが、実のところ、凶星だった。

きのう立花聡局長と一緒に入ってきたかと思ったら、なぜかいつの間にか消えてしまった。

また後で戻ってくるだろうと思っていたのに、結局顔を出してはくれなかったのだ。

何か気に入らないことでもあったのだろうか。

来なくていいといっても、ちゃんと顔を出してくれたあの子が。なんだが、自分が中高生のように気落ちしていることが少々腹立たしくて、ほんの少しその矛先を春樹に向けたくなってくる。

「冷たいんだから。まったく」

ポツリと言った独り言を拾って、北村女史がクスリと笑った。

美沙のいない鴻上支店は、今日もガランとして寒々しかった。

午後から出社した春樹は、窓際の自分の椅子に静かに座り、机の上に町田と咲子と華蓮の3人のホステスの名刺、そして情報を走り書きしたメモを並べてじっと見つめた。

町田健一郎を捜していたというのに、気がついたら藤川咲子という女の辿った日々を覗き見る結果になっていた。

聞かなくてもいい話だったはずなのに、春樹は“何かの役に立つかもしれない”と自分を納得させ、リツコの話最後まで聞いてしまった。

悲しく、寂しい、愚かな女の半生。そこに差し込んだ柔らかな一筋の光。

町田と言う人間がそんな存在ならば、何としても捜してやりたいと春樹は思った。

リツコは咲子の半生を語ったあと、

『町田さんには荷が大きすぎたんだよ。咲子は町田さんの手に負えない。あの女は不幸と契りを結んだような女だから。結局逃げられたんだとしたら、町田さんを捜すのは、どちらにとっても不幸だと思うけどな』と、そう呟いた。

春樹は内心ドキリとしながらも聞かない振りをした。

春樹の頑なな意思を察したのか、リツコは別れ際、半年前に病気で転職したホステスの携帯番号を覚えてくれた。『咲子とも町田さんとも親しかったホステスの連絡先だよ。何か聞けるかも知れない』と言って。

町田の元同僚が教えてくれた町田の実家と、リツコが教えてくれた元ホステスの連絡先。

辛うじて掴んだ二つのルートで、どこまで彼を追えるのだろうか。そして、もし追えたとして、それは咲子にとって良いことなのだろうか。

不意にコンコンとドアをノックする音が響き、春樹は慌てて卓上のものをかき集め、引き出しに収めた。

「はい、・・・どうぞ」

誰だろうといぶかりながら立ち上がって声を掛けると、ドアを開けて入ってきたのは咲子だった。

「咲子さん・・・」

「どう？ 探偵さん。調査は進んでる？」

派手な花柄のロングチュニックに黒のレース地のカーディガンを羽織った咲子は昨日よりさらに妖艶で、匂い立つような色気を纏っている。

相変わらずの濃いムスクの香りの裏に、昨日聞き齧ったその女の重苦しい闇を感じ、春樹はぞわりと鳥肌を立てた。

「いえ・・・まだ」

「いいのよ、急かしに來た訳じゃないの。春樹君の顔、見たくなくて」

咲子は勝手に美沙のスツールを春樹の机の前に持ってきてフワリと腰掛けると、「あんたも座りなよ」と、派手なマニキュアの指でトントンと机を叩いた。

「咲子さん、華蓮を退職されてたんですね」

座りながら春樹は静かに訊いた。もちろん、咎めたかったわけではない。

「行つたのね、華蓮に」

「はい」

「いろいろ分かったでしょ」

「いえ、町田さんに関しては、何も・・・」

「町田じゃなくてさ。馬鹿でマヌケでどうしようもない“藤川咲子”っていうクズ女の事がさ」

「・・・そんな」

「いいのよ。そこまで調べられたのなら、そこそこの探偵さんよ」

「いえ、でも依頼は町田さんの調査で・・・」

「きれい」

咲子は両肘を机につき、組んだ手の上に顎を寄せ、正面からじつと春樹を見つめた。

「・・・え？」

「あんたの目、すごく綺麗」

「・・・」

「どんな宝石もさ、そんなに綺麗だとか欲しいとは思ったことないのよ。でも、あんたの目は、すごく綺麗。見てると吸い込まれていく。琥珀だね。不思議な光り方をする。なんてキレイなんだろう。・・・欲しいな、それ」

春樹はじつと見つめてくる咲子の目に射すくめられ、何と返して良いか分からず困惑した。

ただの戯れだと聞き逃そうとしたが、その目の強さに言い知れぬ気迫のようなものを感じ、身体が動かなかった。

漠然とした不安を感じながら、春樹もまた同じように、正面に座る女を見つめ返した。

第9話 姫

春樹が返事に困っている様子を満足そうに眺めたあと、咲子はぐりと部屋を見渡し、キャビネットの脇に置いてあった立花探偵事務所 の 証明書に目を止めた。

そこにはこの事務所の所長、戸倉美沙の名やフランチャイズ登録番号等が書いてある。

「ここの所長さんは女性なのねえ。ずっとお休みなの？」

「はい。少し休養中なんです」

話題が変わったことにホッとしながら春樹は答えた。

「私のカンでは若い娘さんだね。美人でファッションセンスもいいけど、少しばかり整理整頓が苦手で、だらしない」

「え。何でわかるんですか？」

思わずそう声をあげ、春樹は美沙のデスクの周りを見渡した。

確かに若い女性向きのファッション誌が雑然と壁の書棚に突っ込まれ、使うのかどうか分からない化粧ポーチやマニキュアの小瓶がサイドテーブルのかこの中に放り込まれている。

春樹は気にならなかったが、同じ女性から見たら、宿主の残像が見えるのだろうか。

「そして、気は強いけどロマンチスト。惚れっぽいくせに、好きな男に好きと言えない内向的な面もある」

「・・・そうなんですか？」

今度は春樹にはピンと来なかった。

ただ、何とも言えないダメージを感じ、気分が萎えた。美沙の恋愛観など、今は聞きたくない。

「そこに小説が数冊あるじゃない。同じ作者の本を私も何冊か読んだ。だから、似てるのかなあって思ってたね」

咲子の視線の先には仕事用ファイルに並び、薄い文庫本やペーパーバックが数冊、突っ込まれていた。

翻訳ものらしく、確かに同じ作者のものが多かった。

「そこには入ってないけどさ、16歳くらいの時初めて読んだ、エジプトの歴史小説がとても記憶に残ってたね。ファラオをめぐる争いに巻き込まれた小国の14歳のお姫様が、敵国の王子に恋をするのよ。こっそり敵国の王子と会い、他愛もない話をし。けれどその戯れが、ついには自国を窮地に追い込む羽目になって、大好きな実の兄を死なせてしまうの」

急に物語のあらすじを語り出した咲子は、一瞬39歳という年齢を感じさせない、何とも言えない若々しさを醸し出した。

春樹はなぜか厳粛な気持ちになり、ただ黙ってその依頼人を見つめた。

「そのお姫様は結局その敵国の王子に騙されてた事に気付くんだけど、もう、遅くてさ。自分も敵国の兵に捉えられながら、言うの。

『死の馬よ。どうか私を連れ去っておくれ。光の届かぬ海の底へ。』

息も出来ぬ土の下へ。愛などと言う、残酷な言葉のない、闇の国へ」

┌

咲子はそこまで言うと、満足するでもなく、楽しげでもなく、ただぼんやり一点を見つめて黙り込んだ。

この人はここへ何をしに来たのだろうか。

ただ寂しさを紛らわしたいだけなのか、話し相手が欲しいだけなのか。

春樹は沸き上がってきたそんな疑問を胸に押し込めながら、少し腫れ物に触るように言ってみた。

「そのあとでお姫様はどうなったんですか？」

「あっさり殺された」

「可哀想に」

「幸せよ」

「え・・・」

「馬鹿な女は死ねばいい」

静かな呟きの中にカミソリのような鋭いものを感じ、春樹は息をのんでじっと正面の女の目を覗き込んだ。

「咲子さん？」

「ん？」

「あの・・・」

「ああ、ごめん。邪魔だったよね。もう帰るから」

「いえ、邪魔なんてこと無いです」

「明日また来ていい？ この時間に」

「あ、・・・はい」

「よかった。じゃあ、明日またね。楽しみにしてる」

咲子は口元だけで微笑むと、フワリと香りを漂わせながら身を翻し、振り向くこともなく部屋を出ていった。

静かで妖艶で大人の香りを漂わせながら、その内面は少女のように一途で頑なで激しい風を閉じこめている。

春樹は初めて女の人を“怖い”と感じた。
理解できないが故の恐怖だ。

咲子の内面の風に晒されたら、自分みたいに脆弱な葉っぱはきつと、呆気なく消し飛ばされてしまう。

明日また来ると言ったあの人は、自分に何を期待しているのか。

明日までに新たな町田の情報が、何か一つでも欲しいのか。

もし、明日になっても明後日になっても、結局なんの情報も集めら

れなかったら、どうすればいいだろう。

こんな深いところまで咲子の人生を覗き見ながら、規約通り初動調査料だけもらって“はいサヨナラ”なんてことを、彼女は許すのだろうか。

《琥珀だね。なんて綺麗なんだろう。・・・欲しいな、それ》

何のつもりだか分からない咲子のそんな言葉をふと思い出し、春樹はほんの少し、身を震わせた。

第10話 疑念

『町田さんなら、実家のあった大分に帰ったはずよ』

夜になってやっと、リツコに教えてもらった元ホステス、聡美に電話が繋がったのだが、開口一番彼女はそう言った。

どうやらリツコがあらかじめ連絡を入れてくれていたようで、聡美はとても好意的に春樹に協力してくれた。

『私も偶然出身が大分だったから、その事もあって話が弾んでね。咲子と二人で町田さんの田舎の別府の話で盛り上がったの』

「じゃあ町田さんは田舎に帰るから会社を辞めて、咲子さんの前から消えたんですか？」

春樹が訊くと、聡美は少しばかり不思議そうな声を出した。

『ねえ、君はさあ、咲子から町田さんを捜すように頼まれたの？』

「・・・はい」

『それだったら変よね。だってさ、町田さんが田舎に帰ったことを、私は咲子から聞いたのよ。町田さんの実家が売りに出されていることも、町田さんが別の借家に住んでることも。2カ月くらい前かな街で咲子にバッタリ会ってね』

「・・・え？」

『目の下にアザ作ってたからどうしたのか訊いたら、昔の男に住みつかれちゃったって、苦笑いしててさ。だから、そんな男蹴り飛ばして、町田さん捜して懷に飛び込んだじゃないよって言ったの。そしたら咲子が言うのよ。“町田さんは大分に帰っちゃったからね”って。でもまだスツキリ酒もクスリもやめられないから、会いに行けないんだって。・・・ね？だから変でしょ？咲子は町田さんの居場所を、少なくとも2カ月前までは知ってたのよ』

春樹は言葉が出なかった。

今現在の居場所が分からなかったとしても、大分に帰っていたことを最初に教えてくれれば、そこからの調査はスムーズに行けたものを。

咲子はいったい何を考えているのだろうか。その真意が全く分からなかった。

『まあ、咲子は変わり者だからね。悪い子じゃないんだけど、結局弱いよ。クスリも、半年前はきっぱりやめてたのに。・・・あ、でもね、クスリって言っても、たぶん脱法ドラッグだから。通報とかしないでやってね』

「大丈夫です。・・・いろいろありがとうございました」

『ねえ、春樹くん・・・って言ったっけ』
「はい」

『町田さんはね、咲子には唯一の光だったのよ。町田さんは優しい人だから、咲子から逃げ出したんじゃないって私は思うの。それだけでも分かれば、咲子は幸せなんじゃないかな。見つけてあげて欲しい。町田さんを』

しんみりと言った聡美のその言葉は、いつまでも春樹の耳に残った。

僕もそのつもりでいます。

そう言おうと思ったのだが、なにか割り切れないものを咲子に感じ、結局春樹はただ礼を言っただけで、電話を終えた。

「暗いっ!!」

春樹の目の前のテーブルに缶コーラをドンと置いて、隆也が言った。春樹がマンションに帰るとすぐに、この友人はスーパールの袋をひっさげて訪ねてきたのだ。

「例の人捜し、行き詰まってるのか？」

前回春樹に無理やりビールを飲ませたことを反省しているのか、隆也は今日、大人しく一人で飲んでいる。

「行き詰まってるっていうか・・・依頼人が何考えてるのか分からなくて」

「いいじゃん。何考えてたって。ターゲットをとにかく捜して、見つければ万々歳。見つからなければ『ごめんなさい』だ。割り切っちゃえばいい。変に依頼人の気持ちを考えたりするから、そんなに暗い顔になっちゃうんだ」

春樹はゆっくり顔を上げ、健康的な肌をした生氣のみなげる友人の顔を見つめた。

「美沙もずっと前、同じ事を言ってた」

「そうだろ？ あの人たまには良いこと言う」

「たまにはって・・・」

春樹は小さく笑った。

隆也の美沙嫌いは、少しマシになったのだろうか、と思いながら。

「ところで美沙さん、どう？ 今日も病院行ってきたんだろ？」

「いや・・・行かなかった」

「めずらしいな。そんなに忙しかった？」

「そんなこと無いけど、行っただって、なにも話すことないし・・・どうせあと一週間もすれば退院だし・・・」

春樹は言いながら、ほんの少し視線の置き場を探した。

胃の辺りが、ザラリとする。

「ふん」

隆也は缶ビールを口に付けたままチラリと春樹を見たあと、「まあ、どっちでもいいけど」と、付け加えた。

隆也のそんな反応は、こちらの本心を見透かされているような、落ち着かない気分にさせられる。

何を感じ取ってるんだと、隆也に訊きたくなる。

けれどこんな時にはこの友人は決して春樹に触れては来ないのだ。

あの突き抜けた秋の青空、乾いた草の大地に包まれるような安心感が欲しくとも、春樹が自分から手を伸ばすことはできない。

春樹が隆也と友人で居続けるために、自分で作ったルールだった。

「なあ、春樹！」

いきなり目の前にグイと突き出された隆也の顔に春樹はハッとし、我に返った。

「俺もやつぱり人捜し、手伝うよ。この頃ちよつと勉強のほうも余裕あるしさ、なんか手伝わせてくれよ」

「ダメだつて言つたろ？ 規約に反するし」

「事務所通さない仕事だろ？」

「そうは行かないよ。それに、どっちにしろ依頼人のプライバシーに関わる」

「関わらない範囲で」

「しつこい」

「協力したいだけなんだ」

「これは僕の仕事だし、自分一人でやり遂げたいんだ。隆也にやつて貰えることは、何もないよ」

「冷たいな・・・」

隆也は本気が嘘か分からない口調でそう言つと、もうぬるくなったであろうビールをまずそうに啜った。

そして目の前のビールの缶に視線を落としたまま、今度は、静かな優しい声色で、

「じゃあ、そんな辛そうな顔、するな」と、ポツリと付け加えた。

第11話 触

翌日、いつも通りに出社した春樹は、町田の実家があった別府市桜ヶ丘の不動産会社を検索し、片っ端から電話を入れた。

ダメ元で、“数年前までその番地に空き家があったが、今はどうなっているか分かりませんか？”と訊いたところ、思わぬ成果があった。

その物件を扱っていたと言う不動産会社に当たったのだ。

町田の実家の売買は、7、8か月前に契約が成立していた。

電話の相手がその時の担当者だったのは幸運だったが、手続きはすべて完了しており、その契約者、つまり町田本人の今現在については、全く分からないと言う。

電話で訊けるのはそこまでであり、そして春樹の手元に残ったのは、また振り出しに戻ったという厳しい事実だけだった。

咲子は、町田の実家がもう無いということを知っていた。

聡美に語ったことは“事実”だった。

と、いうことは、“その近くに借家を借りて住んでいる”ということも、事実なのではないだろうか。

では、なぜあの女は自分にこんな調査を依頼したのだろう。

全て知っていたのなら、なぜ。

疑問はジワジワと胃に溜まり、少しずつ不快感に変わり、嫌な熱を帯び始めた。

コンコン、と昨日と同じノックの音が響くと、春樹は堪らずに自分から走り寄り、その女の為にドアを開けた。

生成のセーターと濃紺のロングスカートの咲子は、今までとは別人のように若々しく、春樹を驚かせたが、それでもここ1時間ほどの春樹の鬱々とした気持ちは収まらなかった。

「どうしたの？ 今日には機嫌悪そうじゃない」

咲子はサッサと応接用のソファにドカリと座り、酒に酔ってでもいるのか、どこかトロロンとした目で見上げてきた。

「どうして嘘をつくんですか」

春樹は怒りを抑えて静かにそう言い、自分も咲子の向かい側のソファに腰を下ろした。

「嘘？」

「あなたは町田さんの居場所を知ってるんでしょ？」

春樹がそう言っていると、咲子はゆっくりと口角を上げ、奇妙な笑みを作った。

「へえ。そうか。ばれちゃったか。それで？」

「それでって・・・何ですか」

「それで、町田は見つかったの？」

「いえ・・・でも、現住所をあなたは知ってるんでしょ？ どうしてそんな回りくどいことをするんですか。居場所を知ってるなら教えてくれればいい。いえ、そもそも、自分で行けばいいんだ。どうして僕なんです。僕をからかっているんですか？ こんな頼りない癖に探偵なんかやってるから、からかってやろうと思ったんですか？」

「違うわ」

「じゃあ、どうして！」

「・・・」

「ちゃんと答えてください！」

「やめて・・・大きな声出さないで」

その弱々しく掠れた声に、ようやく春樹はハッとして我に返り、咲子が小刻みに震えているのに気が付いた。

「咲子さん？」

「なんでもない。平気」

けれどその言葉とは裏腹にその肩は尋常じゃないほど震え、呼吸の音が大きく響く。

何かの発作なのだろうか。

どうしていいのか分からず、春樹はただ慌てて咲子に駆け寄り、行き場のない手を宙に彷徨わせた。

「平気だつて言ってるでしょ！」

その時とつさに振り払おうとした咲子の手が、春樹の手をピシヤリと打った。

春樹は瞬間、雷に打たれたように凍り付き、ただ青ざめてその場に立ちつくした。

咲子は咲子で必死に呼吸を整え、震えが収まると血の気が戻った頬に手をやった。

「ごめんなさいね。前の男が乱暴な奴で・・・大声を出されるとダメなのよ。トラウマで。無様な所みせちゃったね」

・・・ “ 死の馬 ” だ。

咲子がゆっくりと見上げてきた目を、春樹はただ呆然と立ちつくしたまま見下ろした。

・・・それから何？ 孤独、絶望、そんなことで言い表せない、黒い波のうねり。

これは何だろう。見えない。一番見たい水底が見えない。

触れた刹那、ぱっくりと傷口のように開いて見せた咲子の内側。けれどそれは映像でもなく痛みでも感情でもなく、ただ、真つ逆さまに落ちてゆく重力。

「春樹君。あんたをからかったわけじゃないの。ただゼロから探して欲しかっただけ。ただの、私のわがまま。でも、あんたを傷つけたんなら、謝るよ。ごめんね。町田を捜すのが嫌だって言うのなら、ここまでで良いよ。もう、充分やってくれた。ここまでの調査料は、ちゃんと払うから」

「そしてあなたはどうするんですか？」

「・・・え？」

「仕事を辞めて、住むところも飛び出して、決して安くない調査料払って。酒とクスリだけ抱いて。あなたはどうするんですか？」

「・・・」

「死ぬ気ですか？」

「・・・なんとまあ」

咲子は少しばかり目を細めたあと、再び口角をクイと上げ、乾いた笑い声を立てた。

「唐突だね、あんたは。ビックリするよ」

「違うんですか？」

咲子はまっすぐ見つめてくる春樹の視線を受け止めながら、ゆっくりと口を開いた。

「だったらどうする？ あんたが止めてくれる？ この手を掴んで、馬鹿なことをするなって、引き留めてくれる？」

咲子は冗談のように、右手をヒラヒラと振って見せたが、けれどそれに食いつくように春樹の鋭い視線と声が飛んだ。

「町田さんを捜します。全力で探します。だから、咲子さんの持っている情報を全部下さい。もう、僕の力量を測る必要もないでしょう？ 最初の契約通り、町田さんを見つけて、そしてあなたの前に

連れてきます。それでいいでしょ？ そしたら・・・そしたら・・・全部うまく行くでしょ？ クスリもやめて、お酒もやめて、ちゃんと仕事見つけて、変な考えも捨てて・・・」

春樹の微かに震える声を聞きながら、咲子は鼻に皺を寄せ、目尻に皺を寄せ、これ以上ない笑みを浮かべた。

「うん。そうだね。・・・待ってるよ、春樹。町田を連れてきてよ。本当に・・・待ってるから」

- - - 全部ウソだ。

春樹の中で、何かがそう叫ぶ。

咲子に触れた一瞬で春樹が掴み取ったものは、輪郭さえ持たぬ陽炎だった。

まるで得たいの知れないガスのようにジワリと春樹の肺の中に入り込み、痛みを伴って春樹を蹂躪しようと蠢く。

まだ正体の分からぬそれは、少しずつ、少しずつ、確実に春樹の足元を崩し始めていた。

第12話 真実の眠る地

見舞いに来てくれた友人2人を見送ったあと、再び静かになった病室で美沙は携帯を開いた。

やはり春樹からのメールの返信はない。

昨日も顔を出さなかった春樹に、今朝ついにメールを送ってしまったのだ。

普段、わざと素っ気なく装っている癖に、そんな自分が情けなく、そして同時に恐ろしくて堪らなかった。

数日姿が見えないだけで、自分の問いかけに返信してくれないだけで、こんなにも苦しくなる自分が居るのだ。

いざとなればいつでも離れられる。その覚悟はある。そう思っていた。

けれどそれは大きな誤算・・・いや、欺瞞だったのではないだろうか。

あの声が、あの笑顔が、あの髪が、優しい琥珀の瞳が。

触れられなくとも側にいられるという安堵感が、自分にとってどんなに大切なものなのか。

そしてそれが奪われた時に自分はどうなってしまふのか。

ワザと意識を反らしていたそれらの事実が、寒気と焦燥感を伴って足元から這い上がってくる。

ああ。私は・・・春樹を愛している。

放心したようにその気持ちを自分の心臓の中に確認したあと、美沙は一つ、体を震わせた。

《あの日はすぐに帰っちゃっただね、春樹。どうかした？　しばらく顔を見せないとところを見ると、どこか旅行にでも行ってるのかな。あと4日ほどで退院だから、その頃までにはちゃんと帰って来なさいね。睡眠や食事はちゃんと取ること。怪我など、しないように》

その翌日の未明、九州まで直行する長距離バスの中で、春樹は何度もそのメールの文面を眺めた。

普段、仕事の連絡以外でメールなどくれたことのない美沙のその文章は、どこかぎこちなく、僅かに戸惑いを感じさせた。心が疼いたけれど春樹は返信をしなかった。

今は本心を語る事は出来ないし、そして、そんなメールを寄越した美沙を、適当なウソで安心させてあげる優しい気持ちも湧いてこなかった。

今までの自分とは別の自分が、ここに居る。

ただ側にいるだけでいいと思っていた美沙に対する不可解な苦しい感情。きっとそれは、今まで自分が目を背けていた感情だ。

けれど今はその全てに鍵をかけて、改めて保留することにした。

取りあえず今、自分のやるべき事は、別にあつた。

初めて自分が請け負った依頼を完結させる。町田健一郎を捜し出し、咲子に会わせるのだ。

これをやり遂げなければ、今の自分はどこへも進めない。その意志は、自分のものと思えないほど“頑な”だった。

もしかしたらそれは、咲子に触れた一瞬の感情の作用なのかもしれ

ないとも思った。

一方では胸を掻きむしられるほど、この仕事の結末が見たいのに、もう一方では弱腰の何かが《見たくない、引き返せ》と警告する。それは、咲子の声か。それとも自分か。

結局は分からないのだ。ならば、動くしかない。

『間もなく終点。小倉に到着致します。皆様、お疲れさまでした。到着予定時刻は6時25分・・・』

慣れないバスのシートで熟睡できぬまま、春樹は白々と明けてきた窓の外を、カーテンの隙間から薄目を開けて覗いた。

長距離バスを降りた後、在来線と市バスを乗り継ぎ、別府市桜ヶ丘の町田の実家があった場所まで行ってみた。

そこには不動産屋で聞いたとおり、新築の住宅が建てられていたが、その周辺には築40年以上は経っていると思われる家屋が多く、落ち着いた雰囲気の住宅地だった。

春樹はしばらく周辺を歩き回り、庭先で花の水やりをしていた人の良さそうな老人に声を掛けてみた。

「んあ？ 町田さんか？ あそこは爺さん亡くなって3年くらい空き家になっとったけどな。東京のひとり息子が1年くらい前に売りよったみたいじゃ。ワシは息子の顔たてよう知らんが、ウチのばあさんがずいぶん前に聞いた話じゃあ、何でも、仕事続けられんようになるかも知らんし、資金があるんじゃないか言うことやったて。何か病気でもしとんやろうかの」

もう1年半以上前から町田は仕事を辞め、家売って生活資金にすることを決めていたのだろうか。

病気だとしても、なにか釈然としない。

なにしろ、咲子があの日唯一教えてくれた町田の住所は、かなりのへき地だったのだ。

まとまったお金を手元に置き、そんなところに引っ込んでしまう理由も分らない。

咲子も知らない、何かがあるのだろうか。

春樹は老人に礼を言うと、多分最終地点となるはずの、町田の住む東山へ向かった。

その居場所は、咲子自身が3カ月ほど前、時間と金を掛けて、興信所で調べさせたものだったらしい。

ターゲットの最終所在地を、依頼人本人から聞くとするのは探偵に取って、とても屈辱的な事だったが、今となっては咲子がなぜそれを隠して春樹に依頼して来たのかなど、どうでもいい気がしていた。なぜ、咲子自身がここへ来ないのかという疑問も、追求するつもりは無かった。

ただ、ただ、春樹は町田に会いたかった。会えば、全ての苦悩から解放される。

会って、咲子にその事を伝える。出来れば咲子に会わせる。そうしなければいけない。そうしなければ・・・。

次第にじわりと背中に汗をかき、鼓動が早くなり、そして焦燥感に足元がふらつく。

そんな異常とも言える感覚の中、延々と農道を歩き、春樹はようやく町田が借りていると言う民家に辿り着いた。

そこは桜ヶ丘の隣町とは思えないほどの山の中で、ポツリポツリと点在する民家と田畑と、そしてすぐ近くに秘境と呼ばれる溪谷があるだけの、長閑な地だった。

町田の家は、リング農園のすぐ横にポツンと添えられたように建つ、作業小屋のような平屋で、申しわけ程度に屋根のあるガレージには、

随分とホコリをかぶった黒の軽自動車が停めてあった。
町田のものだろうか。

ぐるりと見渡したが人の気配も物音もなく、ただその空間の時間がずいぶん前から止まってしまっているような、いやな予感だけが蠢いた。

這い上がってくる焦燥感をなだめつつ、呼び鈴もないその小屋のささくれ立ったドアをノックしたり、「すみません」と声を掛けてみたり、ガラス戸を揺すってみたりしたが、反応は無かった。

郵便物を見てみようかと、郵便受けを探したがそれも見つからず、途方に暮れかけていた時だった。

砂利の音を響かせながら、私道に乗り入れてきた白い軽自動車が、その家の前まで来てゆっくり停まった。

運転席の女は少し訝るような目を春樹に向けたまま、ゆっくりと降りてきた。

薄いピンクのナース服に白いカーディガンを羽織っており、一瞬春樹は、往診の看護師なのだろうかと思った。

咲子くらいの年齢だろうか。セミロングの黒髪を後ろで一つに束ねた、小柄で清楚な印象の女だ。

もちろん会ったことなど無いはずなのに、初対面だと言う気がしなかったのが、春樹には不思議だった。

「何か、ご用ですか？」

ナース服の女は、体に見合った細い声で訊いてきた。

「あの、こちらは町田健一郎さんのお宅ですか？」

「町田さんに何かご用でしょうか」

春樹は、以前駅でお金を貸してもらったことがあり、返却のためにこちらの住所を教えてもらったのだという作り話を、再びでっち上げた。

とにかく不審がられずに本人に辿り着きたい、その一心だった。ウソは町田が見つかったあとでちゃんと謝罪すればいい。

幸いなことに、その女は春樹の作り話を疑うこともせず、「町田さんらしいな。でもきつと町田さんがここにいたら、あなたのこと『馬鹿正直な子だ』って笑うでしょうね」と、寂しそうに微笑んだ。

そしてそのあとの彼女の言葉を、春樹は半ば、気の遠くなる思いで聞いたのだった。

「町田さんね、20日ほど前から行方が分からないの。捜索願いは出てるんだけど・・・見つからなくて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7337y/>

KEEP OUT 5 死の馬

2011年12月31日16時55分発行